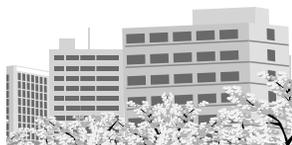


会員の広場



鑑真和上座像と東山画伯障壁画

須山 茂樹（東京）

昨年十一月月上旬、鑑真和上千二百六十年御忌の奈良の唐招提寺に参拝、一般にはなかなか許されない御影堂（みえいどう）の国宝鑑真和上座像と東山魁夷画伯の障壁画を拝観する機会を得た。

和上は持統天皇二年（西暦六八八年）中国揚州に生まれ、出家して戒律（戒は釈迦の教え、律は僧侶などの守るべき生活規範、掟）を講じていた

唐の名僧。当時の日本は白村江の戦で唐と新羅の連合軍に大敗し、唐との関係改善が急務となっており、唐の要請と国内事情から国是としての仏教の確立が必要であった。天皇の意を載した日本人僧侶の願いを受け、和上は渡日を決意され、弟子の反対、役人の妨害や船の難破により何度も渡海に失敗、五度目には海南島にまで流されながら、六度目日本遣唐使船でようやく薩摩半島南端に着、奈良に至り東大寺に戒壇を設けて上皇、天皇の他多くの指導者に戒律を教え、後に律宗総本山の唐招提寺を創建、大和上の称号を授与された。よく知られているように和上は十二年を要した苦難により、来日時には視力を失っておられた。

国民的風景画家東山魁夷画伯は、かねてから要請されていた和上の座像を納める御影堂の障壁画を描くことを承諾、まず一年間鑑真和上と唐招提寺を研究され、その後日本各地を廻って画材を取

集された。その間一年余、千点余のスケッチを描かれた、また、中国を訪問された折には、三年間各地を訪れ、水墨画の風景を描かれた由。

堂の障壁画（襖絵）としては、五室、小襖を含めて六十八面。まず目で日本の風物を見ておられない和上のために、心眼で見えていただけられるような我が国の風景を描くこととされ（第一期）、広間の奥の「上段の間」に霧に霞む深山など（山雲）、続く広間（宸殿）には外海から打ち寄せる波が屹立する岩に当たって砕け、静かに岸に寄せる風景（涛声）。画伯は最初荒海を構想しておられたが、和上の苦難を考えて穏やかな海にされたとのことである。

第二期には、画伯は和上の故郷の中国の風景を水墨画で描くことにされ、北側の中心となる「松の間」に和上の生まれた揚州を（揚州薫風）、その隣の桜の間と梅の間には（黄山晓雲）、桂林月宵を。ともに中国の名勝である。最後に座像を安置

するお厨子の扉には和上の日本到着の地、薩摩国秋妻屋浦（あきめやのうら）（現鹿児島県南さつま市）の湾を描かれて十年に亘る画業を終えられた。この障壁画は画伯の畢生の大作であり、日本の風景画の一つの極致と言えるであろう。説明によると画伯は経費以外の報酬を全く受け取らず、寺はその徳と労を多とし、境内に墓は全くないが、画伯の没後御影堂の庭園に一隅に埋葬を認め、平たい墓石がひっそりと置かれている。

今広間（宸殿の間）に座って、鑑真和上の座像を拝し、興国のため仏教を学んでいる天平の昔に思いを致し、荒波が岩に打ち当たり穏やかに岸に寄せる「涛声」の画を眺めていると波の音が聞こえて来る。

なお、鑑真和上の渡日の経緯、関係する人物の動きなどについては、小説ではあるが井上靖氏の名作「天平の薨」に詳しい。